

TVアニメやマンガなどから見る 子ども達の描く家族像

中 澤 純 子

緒言

「家族」は普段一緒に生活をしていると、「家族」そのものに対して慣れてしまい無関心になりがちであり、良さに気付かないことが多い。私自身、大学生になり初めて家族と離れた生活を送る中で、「こんな時、家族がいてくれたら……」などと思うことがあり改めて家族の良さや存在の大きさを感じるようになった。また、「家族」とはなにか、自分にとって「家族」はどのような存在であり、逆に自分はどういう存在なのか、あるいはどんな役割を持っているのか等を考えるようになった。そこで、私自身も家族について理解を深めたいとともに、大学4年間でサークル活動や、教育実習などを通じて多くの子ども達と触れ合う中で一体、子ども達はどうのように家族をとらえているのかを研究したいと考えた。

平成10年に告示された新学習指導要領で小学校家庭科は「家庭の人間関係や家庭の機能を理解」させることを重視し、自分と家族との関わりや家庭生活への関心を高め家族の一員としての自覚を高めることを強調している。

子ども達にとって「家族」は最初に所属する集団である。その中で生まれ、育てられ、生活を送る場所としての役割をもつだけでなく、将来どんな家族、家庭をつくっていきたいかというモデル的存在にもなっており、子どもに大きな影響を与えているといえよう。しかし、「家族」についての定義を試みたり、その機能や役割について考えても、中々答えを見出すことはできない。さらに、家族は時代や文化、社会状況などとともにその構造や形態が変化し、多種多様で複雑である。

現代社会においても、めまぐるしく変化しつつある家族。家族や家庭生活の重要性を認識させる授業が重視される様になった中で、一体現代の子ども達はどうのように家族をとらえているのか、またどんな家族を求めているのか、小学生の抱く家族像について探ってみたいと思う。

第1章 文献調査

「家族」のとらえ方

「家族」とはなんだろう。考えれば考えるほど様々な考えが思い浮かび困惑してしまう。そんな、一言では言い尽くせない集団である。「家族」を探るうえでまず、「家族」とは一体、何かを考えていきたいと思う。

四方は、「家族の本質は、家族として同一家屋の下で同じかまどの飯を食べ同居して日常生活を共にしている一組の男女の性的共同集団と、血縁共同集団とが相互に混合、併立する合成体を形成しているところにある。その意味で家族の概念を包括的

に定義するとすれば、家族とは、性縁、血縁、社会縁などによって結びついている人々が同一家計のもとで夫婦・親子・兄弟姉妹としての役割を果たし、同一集団に帰属しているという共同意識をもって協同している生活共同集団であると規定することができると定義している。家庭科教育学会によると、「(1) 夫婦、血縁および血族に準ずる関係をもつひとびとが(2) 社会の中の一定の場所(住居)に生活の本拠を持ち(3) 同じ生計の下で生活をしている集団」と定義している。ただし、血族に準ずる関係は、舅、姑、婿、嫁、養親と養子などの姻族および法律上の親族などを示し、生活の本拠地とは単身赴任中の夫、下宿などをしてしている学生などにとって、妻子や親が待つ郷里での住居をさしている。

また、湯沢は、「構成メンバーに着目すれば、夫婦を中核とし、親子、きょうだい、などの近親者を構成員とする血族的集団」と定義する一方で「これら要件のすべてを備えることは不可欠の条件ではない。例えば、夫婦の一方を欠いて父子または母子のみであっても、親または子ないしその双方を欠いて夫婦のみであっても、また真実の血縁はなくても法律的に親子を擬制している養親子であっても、いずれも差し支えない。また、家族集団は(1) 同一住居(2) 同一生計(3) 同一家族意識をもつことが通常の生活形態であるが、現代社会にあっては、就学や就業のために同一住居の要件を欠くことや、生計の同一性がうすめられる場合も少なくない。しかし、同一家族に帰属しているという意識の存在は重要で不可欠である」と述べている。どの説も共通する部分もみられるが、微妙に異なっているこ

とが分かる。また、どれも「家族」という集団を思い浮かべると当てはまる要素があるといえると思う。しかし今、私が感じている家族とは、四方、湯沢の説にあるような「同一集団に帰属しているという家族意識をもつこと」である。決して家族意識だけで家族を定義することはできないが、最も大切なことではないかと感じている。

多くの文献をあたってみたが、どれもこれも家族を一定の概念で定義することは難しいと述べられていた。確かにその通りだと思う。「家族」を一定の定義でとらえなくても、社会に存在する、その「家族」の数だけ「家族」のとらえ方があっていいのではないかと考える。

現代の家族の現状と問題

家族に対するイメージは個人によってそれぞれであろう。自分自身が育ってきた環境や、理想、潜在意識などによっていろいろである。しかし、家族はその時代、社会の変化とともにその時々の特徴をもっている。現代の家族は、どのような特徴をもち、どのような現状なのか、またどのような問題をもっているのかを調べてみた。

高度経済成長の影響をうけ1960年頃から、家族は大きく変わりはじめた。以下にその特徴を挙げていきたい。

(1) 家族の縮小化

1960年以降から核家族率の増加、単独世帯の増加がいえる。

この背景として、

(1) 生産性の高度発展により、第1次産業従事者が減り、サラリーマンが増えたと同時に都市化が進んだ。これにより、急増の住宅が造られたが、狭く多人数の家族生活が困難となり、その結果として、人数を減らさざるをえなかった。

(2) 高齢者のみの世帯が増え、三世代家族または拡大家族が少なくなった。
などのことがいえる。

さらに、子どもの出生率の減少つまり少子化が進んでいることもいえる。高度経済成長により技術とサービスが進むことにより女性の労働の職域と職業形態をひろげた。また、様々な消費やサービス財が家庭にはいり、家庭維持のコストが上がった。家庭への支出を補うために専業主婦から家計を助ける女性が増えたといえる。そして、非婚、晩婚化などにつながり出産可能年齢女性の有配偶率の低下につながる要素となったのではないだろうか。

(2) 家族の多様化

高度経済成長期頃の変化のみられる以降の家族を一般的に「現代家族」と呼ぶ。現代家族は、構成も形態も様々であると同時に、問題点もある。社会が変われば当然、それに呼応して私達の生活や意識も変わってくる。そこに生じる問題は、挙げれば切りが無い。しかし、その中でいかにより良く生活していくかは、大切なことである。

次に、こうした家族の変化の中で実際に子ども達は、どう家

族をとらえているのかアンケートをもとにみていきたい。

第2章 アンケート調査の考察

(1) 調査目的

子ども達は家族をどのようにとらえているのだろうか。1章で述べてきたように家族をとらえることは難しいことである。子ども達にとっても例外ではないだろう。

大部分の子どもはTVアニメやマンガが好きで、よく見たり読んだりしているといえるだろう。よく見るTVアニメやマンガの家族を通して子ども達はどのように家族を見、そこから何を形にしてとらえているのかだろう。

そこで、TVアニメやマンガへの関心、そこから発展する家族意識を尋ねる調査票を作成した。そして、TVアニメやマンガの家族とのクロス集計などを行いながら自分の家族に感じていること、思っていること、理想の家族像などを探ってみることにした。

(2) 調査方法

教育実習校である長野県佐久市立平根小学校の

5年生 男子20名 女子13名

6年生 男子16名 女子18名 計67名

を対象に1999年5月に行った。調査法は同一の調査票による無記名、自記式とした。

アンケートを行った地域、子ども達の特色として

・以前に比べ学級数は減少しているとはいえ、きょうだいのいる

児童が比較的多い。

・兼業農家を営む家庭が多く以前は休日などに家族で畑仕事をおこなったり、子どもが手伝う姿を目にしたが徐々にその姿が消えつつある。

・三代家族が多い。

などが挙げられる。

(3) 調査結果についての考察

1、アンケートの調査結果を考察していく前に、まず、アニメやマンガの家族として挙げた「クレヨンしんちゃん」、「ちびまる子ちゃん」、「たまちゃん」の家族構成を示したいと思う。この3つの家族は、小学生がテレビでよく見る人気の高いアニメから選んだ。また、子ども達が理解しやすい家族構成であることと、家族の多様性を考慮して取り上げた。多様性としては、核家族、拡大家族、きょうだいの有無などが挙げられる。ただし、親の職業、特に母親については、子ども達がよく見るアニメで共働き家庭を描いている適切なものがなかったので条件に含めていない。

ア、『クレヨンしんちゃん』

作者 臼井儀人 1990・8『週刊漫画アクション』で連載が始まる。1991アニメ放映が始まり、以後、大ブームとなる。アニメコミックス『クレヨンしんちゃん』双葉社1995

しんちゃんの家族

しんちゃんの家族は、次のような構成である。

野原しんのすけ。5歳。幼稚園児。父 ひろし。30歳代。サラリーマン。母 みさえ。29歳。専業主婦。妹 ひまわり。0歳。

イ、『ちびまる子ちゃん』

作者 さくらももこ1986『りぼん』で連載が始まる。

1990アニメ放映が始まる。りぼんマスコットコミックス『ちびまる子ちゃん』集英社

まるちゃんの家族

まるちゃんの家族は、次のような構成である。

さくらももこ。9歳。小学3年生。父 ヒロシ。40歳。おそらくサラリーマン。母 すみれ。40歳。専業主婦。祖父 友蔵。年齢不明。祖母 名前、年齢不明。姉 さきこ。12歳。小学6年生。

たまちゃんの家族

*『ちびまる子ちゃん』に登場するまるちゃんの友達の家族である。

たまちゃんの家族は、次のような構成である。

たまちゃん。9歳。小学3年生。父 名前、年齢不明。母 名前、年齢不明。専業主婦。

2、次に、子ども達がアニメやマンガの家族をどのように見ているのかをアンケートの結果とともにみていきたい。

『クレヨンしんちゃん』『ちびまる子ちゃん』『たまちゃん』の家族で同居したいと思うのはどの家族ですか、とその理由を複数回答で尋ねたところ次のようになった。

「しんちゃん」、「まるちゃん」、「たまちゃん」の家族を選んだ理由を全体として見ると、一番多いのは、「にぎやか」62・7%。次に「おじいちゃんおばあちゃんがいる」、「みんなでいっしょにご飯を食べる」25・4%。以下「遊んでくれる」23・9%、「きょうだいがいる」20・9%、「家族数が多い」19・4%、「たのしいお母さんがいる」14・9%、「その他」13・4%、「はめてくれる」10・4%、「しかってくれる」9%、「たのしいお父さんがいる」、「やさしいお母さんがいる」6%、「やさしいお父さん」4・5%、「うるさい」3%、この他の理由は0%だった。

以上の結果から、次の3点が指摘できる。

イ、おじいちゃんおばあちゃんがいる、きょうだいがいる、家族数が多いなどの構成員の人数を理由としているものが多い。

ロ、にぎやか、みんないっしょにご飯を食べる、遊んでくれる、などの家族同士の関わりを理由としているものが多い。

ハ、やさしいお母さん、お父さんよりもたのしい、はめてくれる、しかってくれる、といった理由を選んでいる割合がわずかではあるが高い。

まずイについては、理想の家族数を尋ねたところ4、5、6人の家族を理想としている児童が多かった。また10人以上の少し非現実的ともいえる回答も全体の15%で予想以上に多かったということも見逃せない。いずれにしても、多くの児童は、家族の縮小化の中できょうだいがいたり、祖父母と暮らすような多人数の家族を望んでいるのだろう。4、5、6人という家族

数をこたえた児童は、現在の自分の家族数と照らし合わせているのかもしれない。

ロについては、家族は一緒に住んでいるとはいえ各人の時間のずれから、実際にみんながそろったり、遊んだりすることはあまりないのではないかと考える。それ故子ども達は、何かしらの形で家族と触れ合う時間や場所を求めているように思う。「まるちゃんの家族」は毎回のようになでご飯を食べている。また、その他の理由の中に「夜、みんなと話をする」という回答があったが、ご飯以外でもお茶をのみながらみんなが集まることが多い。「しんちゃん」の家族も、みんなでご飯を食べたり、子どもとお父さんとが遊ぶことが多い。「クレヨンしんちゃん」も「ちびまる子ちゃん」も5、6年生より幼いが、家族とのコミュニケーションをとることに限っては学年、年齢を超えて何か羨ましさがあるのかもしれない。

またハについては、かつて親の姿として「厳父慈母」という言葉があったように、父親は子どもに厳しく、母親は慈しみ深く子どもをかばうという姿が理想とされていたようだが、今日の社会や生活の変化によって、親の姿は大きく変わってきている。望月によると、親の役割は、子どもの生活における身体的、精神的、物質的、社会的安全を保障する保護者の役割と人間としてどのような生き方を示す指導者としての役割があると指摘している。こうした役割を遂行していくためには、勿論やさしさも大切だろうが、時には厳しく、また、叱る時には叱り、良くてきた時には誉めることも大切だと思う。子ども達は、それを理解し、しっかりと叱ってくれるような威厳のある

親、誉めてくれるような親・自分を分かってくれるような親を求めているのではないだろうか。

3、次に子ども達の家族意識を見ていきたいと思う。

家族の役割について、自由記述で回答をしてもらったところ、約1割(67人中7人)の回答しか得られなかった。その内訳は、5年生 男子では20人中1人、女子では13人中2人6年生 男子では16人中0人、女子では18人中4人である。残りの約9割の児童は「分からない」というものだった。

まず、何かしらの回答をしてくれた児童のものをみてみると次のようなものが挙げられる。

・楽しく暮らす ・助け合う ・支えてくれる ・一緒に過ごし協力して暮らす ・話したりする

何れも生計や住居をとにもするなどの生活に必要な物質的なものではなく、同一集団であるという家族意識や、目に見えない暖かさのようなものを指摘していた。

さらに、この「分からない」と回答した児童の中には、「いろいろとあって分からない」というものもあった。明確な考えをもっていないということではなくて、うまくまとめられなかった児童もいるようである。

子ども達にとって、この役割というのは家族の定義と同じようにいろいろあり、明確な答えを見出すことは難しい。しかし、その基盤として、子ども達が挙げていたような役割が必要だろうし、また役割を曖昧なものとしてではなく、一人ひとりがしっかりと見つめていくことは大切なことだと考える。

家族のよさを感じることがあるかどうか、またあるとしたらどんな時なのかを尋ねた。

集計結果を見ると、「よさを感じる事がある」が多い。しかし、6年生や男子は、「よさを感じる事が無い」、5年生や女子は、「分からない」という回答が多かった。

子ども達が「よさを感じる時」は次のような分類ができる。

① 娯楽時 例えば、遊んでくれる時など

② 学問的な教養や技術を教えてもらった時 例えば、勉強、宿題をみてくれる、スポーツを教えてくれる時など

③ 精神的な安定を得られた時 例えば、大切にしてくれる、慰めてくれる、励ましてくれる、疲れを癒してくれる、やさしい、話相手になってくれる時など

④ 強い指導力や頼もしさを感じた時例えば、困った時に教えてくれる、叱ってくれる時など

5年生は、①に該当するものが多く、中には、わずかにだが、叱ってくれる、慰めてくれる時など③、④に当てはまるものがあった。しかし①の娯楽時が最も多かったことから、まだまだ、家族と遊びたいという幼さが見える。6年生は②、③に該当するものが多かった。②は何か教えてもらうことで、頼れる存在としてよさを感じているのではないだろうか。③は家族を心の拠り所として、よさを感じているように思えた。「分からない」、「感じる事が無い」という回答が多かったのは、役割と同じように、子ども達にとって質問が漠然すぎてしまったのかもしれないし、あまりにいつも近くにすぎて気づかないのかもしれない。

ない。また、特に「感じる」ことがない」については現代の家族は様々な形態や問題を抱えている。複雑な家庭環境に置かれている子どもがいることも忘れてはならないだろう。

次に、家族がいないと困ることがあるかどうか尋ねた。

集計結果を見てみると性別、学年を問わず、多くの子ども達は、家族がいないと困ることがある、と意識しているようだ。理由としては、特に男子は、食事の支度や、家事を理由に挙げている。また、全体を見てみると生活費に困る(働く人がいない)、病気になった時なども多かった。5年生の男子には、役割がなくなるというものもあり、自分の居場所を家族の中に感じているものや、6年生では、疲れをいやせない、相談相手がいなくなってしまうなど精神的な面で困る理由を挙げている児童もいた。子ども達の意識の中には食事や生活費など生きていく上で、最低限必要なものもあるが、精神面でも家族がいないと困る事があると感じている児童も少なくはないといえる。

私自身、困った時に家族のよさを感じることが多い。子ども達は一体どうなのだろうか。そこで、家族のよさを感じるか否か及び家族がいないと困るか否かをクロス集計により見てみた。「よさを感じる」と、「困る事」の理由は必ずしも一致しないが「よさを感じる」ことがある」と回答している児童は「困る事がある」と回答している比率が高い。よさを感じるからこそ家族がいなくなった時に困るという気持ちがあるのではないだろうか。よさを「感じる」ことがない「けれど困る」とは「あると思う」、「分らない」、「よさは「分らない」けれど困る」とは「あると思う」、「分らない」といったものは、よく分らないけれど

ど困ることはあるのかもしれない、家族のよさは感じないけれどもいなくなったら困るかもしれないなど、いろいろな心理が推測できる。困ることやよさは目に見えるものではない。これらは、子ども達の素直な心の表れの一つのように思う。

4、次に家事の性別分業について見てみたい。

性別家事分業について尋ねたところ学年差はあまりでなかった。しかし、性別では男子と女子で意見に多少の差がみられた。男子は、「男女で協力してする」、「分らない」がほぼ同数であるのに対し、女子は「男女で協力してする」が圧倒的である。「女の人がする」、「に対しては、わずかながら賛成がみられたが「男の人がする」については0人だった。子ども達の中には、どちらか一方のみがするということ意識はあまりないようだ。

家族がいないと「困ること」と、「家事の賛否」についてどう思うかクロス集計をしたところ、困ることが「あると思う」と感じている児童は、家事について「男女で協力する」と回答しているケースが多い。家事は生活の中で毎日しなければならぬ仕事である。誰がすればいいと断言できるものではない。家族がいないと困ることについての考察で述べたが食事や家事を理由に挙げているものが多かった。家事に対して「困ることがある」と感じるということは、裏を返せば誰かに頼っている、任せているともいえるのではないだろうか。「男女で協力する」という回答が正しいとはいえないが、子ども達には生活をより良くしていく為にこうした意識をなくさないでほしいと思う。

第三章 まとめ

TVアニメやマンガの家族を通して子ども達が何を感じとり、何を求めているのか、少しずつ覗くことができたように思う。調査の実施に先立って、何回かTVアニメを見たり、マンガを読みながら、それぞれの家族のよさやキャラクターの持ち味、一人ひとりの存在の大きさを感じた。例えば「クレヨンしんちゃん」では妹のひまわりが生まれてから、随分と家族のあり方が変わった。今まで以上ににぎやかになったと同時に、主人公のしんちゃんはお兄さんらしく成長し、お父さんやお母さんも、しんちゃん中心から2人の子どもの関わりを見守るようになった。私は、TVアニメやマンガの家族を通して、一人ひとりの存在自体が家族の役割であったり、何気ない日々の生活がよさであったり、一人でも欠けたら何か違った家族になってしまうような気がして困るだろうな、など自分の家族と照らし合わせながら様々な思いが生じた。

子ども達の記述回答の中には様々なものがあつたが、それぞれの児童が自分の家族に感じることの多様性は、そのまま家族の多様性を反映しているようだった。家族は身近すぎて見えにくい存在であつたが、子ども達がどの様に家族をとらえているのかを探る過程でじっくりと立ち止まって家族を見つめることができた。多くの子ども達にとって家族とは自分を癒してくれる場であつたり、コミュニケーションの場であつたり、時には、誉めてくれたり、厳しく叱ってくれるような暖かさを感じるものであるように感じたり求めているように感じた。しかし一方で、「よさを感じることはない」となっているような家庭もある

ことや、「分からない」という家族の存在に対して漠然とした思いの子ども達もいるということを忘れてはならないだろう。

最後に家族に正しいあり方や形はないが、どんな家族でもよさを感じられたり、家族の一員としての自覚を持って生活していくことは大切なことである。そのために、自分は一体何ができるのか、どうしていったらいいのか求めていくことはそれぞれの課題のように思う。また、大人として子ども達に理想を求めるだけではなく自分自身はどうなのかを見つめ直していきたいと思う。

謝辞

卒業論文を書くにあたってアンケート調査に快くご協力していただいた長野県佐久市立平根小学校の先生方、卒業研究Iでお世話になった武藤先生、毎週遅くまで丁寧にご指導頂いた増茂先生、本当にありがとうございます。

注

(1) 四方壽雄「現代家族の生徳」ミネルバ書房、1983

(2) 家庭科教育学研究会「小学校家庭科教育の研究」学芸図書株式会社、1975

*家庭科教育学研究会とは、全国47国立教員大学家庭科教育担当の有志、25大学31名によるものである。

(3) 湯沢雅彦「家族関係学」光生館、1970

(4) 望月嵩「現代の家庭教育」文部省、1988

参考文献(略)